

明学防災 ～かまどを囲もう～

この企画は広域避難指定区域となっている明治学院大学で、学生や地域の人々をまきこんで、災害時に備えたかまどをつくらうというものだ。もし大学内にいるときに地震にあったら…水道、電気、ガスが止まったとしたら…何千人の学生や教員、職員がパニックに陥るだろう。そのために防災訓練は必要であるが、「防災」と聞くとほとんどの学生は面倒くさく思ってしまうのではないか。そこで学生がもっと楽しんで積極的に防災に関われる「かまど作り」を提案した。大学内にかまどがあれば、定期的にかまどを使用するイベントなどを開き、学生や地域の人々が交流する場を提供することができる。さらに、学生が地域の人々と電気、ガスに頼らずかまどを使って食事を作り、協力することを共に経験し、本当に災害が起こったときに冷静な判断をし、手際よく行動できる人を育てることにつながる。このような大学内にかまどを設置することの重要性は理解されたものの、火気を使用する設備を大学内に置くことは、維持管理の点や法律的な点で難しく、大学にかまどを作ることは断念した。

そこで私たちは大学内にかまどを作らずにその重要性を知るために、大学近くの舞岡公園の小谷戸の里で、かまどを使ってもちつきをした。舞岡公園の指導員の方にかまどで火をたく方法や作業の手順などを学んだ。普段使っているガス、電気コンロとは違い、火を絶やさず見張らなければいけないし、もち米を炊く時間もしっかりチェックしなければいけない。電気やガスがないと1人分の食事を作ることも大変だということを実感した。この舞岡公園での経験をもとに、今度は大学でもちつきを行った。他の学生にもこの体験をしてもらい、災害時の心得を共有することができた。

また、12月に戸塚駅前で行われた「冬至キャンドルナイト in Totsuka」に参加し、キャンドル作りなどのワークショップを行った。停電時はろうそくやコンロなど「火」を使って過ごすことが想定されるが、近頃の子どもたちは火に親しむ機会が少なく、マッチはおろかライターを点けることさえできない子どももいるという。そこで、ろうそく作りワークショップやキャンドルアートと一緒に火を点けるといいう「遊び」を通して子どもたちが火の扱い方を学び、火に親しむきっかけを作った。防災やかまど作りという点からは少し離れてしまったかも知れないが、この企画を通し、学内にとどまらず地域へと活動の域を広げることができた。

本来の企画案であった大学内にかまどを設置することは達成できなかったが、学内外のイベントで学生同士や地域の人々と交流し、防災について理解を深めることができた。楽しく防災というコンセプトのもと、地域、学生をまきこんで発信することの重要性を学んだ。今後も大学内で今回のもちつきイベントのような防災に関するイベントをしていくとともに、地域とのつながりを様々な活動で生かしていきたい。

(国際学部国際学科2年 原みずほ)

